**マードック学会第６回大会**

**高橋　和久**

　マードック学会第６回大会は、相当に大きな台風の祝福を受けることが予想されましたので、会員の皆さんが出席してくださるかどうか、会場を用意させていただいた人間としては、ずいぶんと心配しました。実際、残念ながら、参加できなくなった会員の方もいらっしゃいました。それでも大会前日に東京にいらしていた方々を含め、ほぼこちらが当初考えていた人数の出席があり、楽しいひとときを過ごすことが出来たように思います。招待したわけではないのに、台風も当日午後から夕方まで顔を見せてくれたおかげで、ありがたいことに、強風豪雨の中、びしょぬれになって学会案内の看板を仕舞うという貴重な経験ができました。（お役に立ったかどうか、看板は正門と赤門の２箇所に設置しましたが、大きな声では言えないことを申し添えますと、その場所は実は大学本部の管理下にあり、全学的な承認を得ないと看板を置いてはいけないことになっておりまして、そうした面倒な手続きを省略したわたしは不法行為を行っていたことになるわけで、どうしても当日夜までに撤去する必要があったのでした。豪雨と強風の中、証拠隠滅を図る犯罪人のようなスリルはなかなかのものです。）台風の存在感は決して小さくありませんでしたが、懇親会の終わる頃には退席してくれていました。

　それにしても当然とはいえ、マードック文学が好きという会員の方々の熱意の伝わる集まりでした。いや、台風襲来という特殊な状況がかえって、マードックへの愛を一層高めた、などと申し上げたら、怒られてしまうでしょうか。伺うところによれは、マードック学会はこれまでも天災とかなりの友好関係を結んでいるとか。会員間の絆を強めるのに天災が貢献してきたに違いないと思います。そう考えるような散文精神はマードックの読者としてどれくらい似つかわしいのか、わたしには分かりません。いずれにしても告白すべきは、こんな呑気な発言からもお分かりの通り、わたしが実のところマードックのまじめな研究者でもなく、マードック学会のことをよく知っている人間でもないということです。正直なところ、わたしは20年近く前に室谷先生と同僚になるという偶然がなければ、おそらくこの学会とは縁がなかっただろうと思われる睡眠会員で、今回がはじめて参加する大会でした。

　英文学の、或いは文学の退潮、衰退がさまざまな局面で実感される現在、文学愛好家の方々と共有する時間はますます貴重なものになってきたように思います。そしてもしかすると、小人数の集まりのほうが、そうした時間は濃密になるのかもしれないという気も致します。小説経験というのはきわめて個人的なものであり、環状線の電車に乗っているときは、外側の軌道と内側の軌道では円周距離が違うのに脱線しないのはなぜだろうかと心配したり、悩んだりするのが正しい乗り方であって、車内で人目もはばからず小説を読むなどというのはレスペクタビリティに反する――と一応わたしもふだんは学生に正しい礼儀作法を教えております――行為に違いないわけですから、小説についてみんなで語り合うことのできる学会の集まりでは、無作法や礼儀知らずになるという快感を味わうことができます。刺戟的な研究発表や特別講演をきっかけにして懇親会で話に花が咲くのはそのためでしょう。咲いた花に実を結ばせるために２次会に行くという手もあります。

　今回の大会では会員の皆様の会話にどのくらいの花が咲き、実を結んだのでしょうか。会場責任者としては、花や実が台風に飛ばされなかったことを祈るばかりです。そしていろいろあったに違いない不手際について、この場を借りてお詫び申し上げます。今回は外回りのことばかりが気になって、楽しい話にあまり参加できませんでしたが、来年以降の大会ではさらに大きな花が咲き、実が結ばれることを信じております。そして今度は可能であれば目覚めた一会員として、皆様と楽しい時間を共有したいと願っております。